

外山脩造の企業者活動に関する資料（1）

長岡大学准教授 松本和明

はしがき

外山脩造（1842-1916）は、古志郡栃尾郷小貫村（現・長岡市栃尾地域）に生まれ、幼い時から国学・漢学などを学び、江戸の昌平坂学問所でも研鑽を積んだ。この間、河井継之助と知遇を得て、師と仰ぐようになった。明治維新直後の北越戊辰戦争では長岡藩軍事総督となった河井に従った。戦争終盤に河井が負傷して会津若松の逃れるなかで、外山は河井から、当初は武士に取り立てようとしたが、「世の中は大変面白くなつて来た、寅や（外山の幼名は寅太であった：引用者）何でも是からの事は商人が早道だ、思い切つて商人になりやい」（武内義雄編『軽雲外山翁伝』商業興信所、1928年4月）と諭した。

河井の死後、外山はその言に従い上京し、慶應義塾および開成学校・共立学舎で学んだ。秋田県庁での勤務の後に大蔵省（現・財務省）に出仕し、国立銀行の調査・検査を担った。在職中には、岸宇吉や三島億二郎などを中心に計画されていた長岡での国立銀行設立に全面的に協力している（第六十九国立銀行、現・北越銀行）。

その後、渋沢栄一の強い勧めで大阪の第三十二国立銀行の総監役に就任して金融界に転じた。さらに、日本銀行理事兼大阪支店長や大阪貯蓄銀行副頭取なども歴任した。

外山は近代産業・企業の立ち上げにも尽力して、1893（明治26）年に佐渡島出身の技術者である生田秀などとともにおおさか麦酒会社を設立し、翌94年には最新鋭のビール醸造設備を整えた吹田醸造所を開設した（現・アサヒビール）。また、1899年に阪神電気鉄道を設立して初代社長に就任し、1905年に大阪・神戸三宮間の開通を実現した。

外山は大阪をはじめ関西の近代的ビジネスやインフラストラクチャーの確立・整備を主体的かつ旺盛に主

導し、金融界・産業界の代表的なリーダーの一人となった。

外山の足跡や生涯については、前述した外山の伝記である『軽雲外山翁伝』にひととおり叙述されている。しかし、外山については、企業家としての業績・功績ないし成果や理念・思想、さらには人物像ないしパーソナリティなども含めて、より多面的な分析・解明をおこない、改めて評価する必要がある。そこで、本稿では、伝記をはじめとしてこれまで収集した資料の一端を、その時代背景や外山との関係とともに紹介していくこととしたい。

資料Ⅰ 大蔵省銀行課時代の新潟港、新潟県経済・産業および第四国立銀行についての調査報告

<解説>

外山は、1873（明治6）年に大蔵省へ入り、78年12月に退官するまで主に銀行課に勤務した。中心的な担当業務は、全国の国立銀行の経営動向について調査・分析および実地検査であった。

外山は1877年4月に、前野貞太郎とともに新潟港、新潟県内の経済・産業の状況および第四国立銀行の経営動向、長野県内の経済・産業の状況および第二十四国立銀行（飯山）・第十九国立銀行（上田）・第十四国立銀行（松本）の経営動向の実地調査をおこない、その結果は同年6月29日刊行の『銀行雑誌』第7号に掲載された。このうち、新潟港と新潟県内経済・産業についての分析のポイントは以下のとおりである。

- ・新潟には廻船業者は多数存在しているものの、その多くが船舶を所有せず、他船の荷捌きが主体
- ・主要商品の1つである米は、2／3が下関・大阪、1／3が北海道へ移出

- ・下関や大阪方面からは、綿・塩・鉄・木綿などが移入
- ・北海道との取引が盛んで、米以外は酒・味噌などを移出、塩・魚・鱈・魚油などを移入、これら移入品は会津若松・米沢方面へも供給
- ・新潟港では飛脚船や西洋型帆船の通航がなく、荷為替の取り扱いなども不便
- ・貸倉庫が数多く存在し、その多くが鈴木長八の所有、信濃川対岸の沼垂にも多数存在
- ・新潟港は「皿港」で、信濃川河口に位置するため遠浅で大型船の停泊が難しく、悪天候時は佐渡島に回避しなければならず、港湾としての機能を果たしているとはいえない
- ・河川舟運が発達している一方で、道路は極めて未整備、このなかで東京へのルートでは「清水越」が三国峠経由より短時間であり、本格的に整備されると有用
- ・見附の商人による木綿織（「見附織」）が東北地方および北海道にも販路を拡大していたが、長岡で新たに開発された製品が技術改良と品質向上により評判となり競争力を獲得
- ・長岡の商人は、江戸時代は「旦那様商売」で消極的であったが、北越戊辰戦争からの復興のなかで積極的な姿勢に転じ、金巾をはじめ様々な商品を東京から仕入れて販売し、商業では県内トップとなり、県内の商人は長岡から仕入れることが多くなっている、設立準備中の第六十九国立銀行が開業すれば、より以上の拡大・発展が期待できる

外山の分析・予測は、いずれも正鵠を得たものといえる。新潟港の問題は地域発展の最大のボトルネックとなった。他方、長岡についての指摘は故郷への期待に満ち溢れている。

第四国立銀行の調査は1877年4月6日に実施され、子細にわたり報告されている。

本資料は、日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治大正編 第6巻』（大蔵省印刷局、1957年12月）に所収されている。紙幅の都合で一切割愛するが、長野県の経済・産業の状況、国立銀行3行の動向の分析も緻密なものである。併せて参照されたい。

銀行検査官報告書撮要

検査官 四等属 外山 脩造
八等属 前野眞太郎

新潟港並ニ其他ノ景況

新潟港ハ戸数九千余市中溝渠連環相通シ橋々相望ミ毎街小舟ヲ通スヘシ其便ナル恰モ大坂ト一般市中景況頗ル繁華ナリ、該港ハ廻船問屋ト称スルモノ百余名魚問屋ト称スルモノ拾余名アリ右問屋ノ内自カラ船舶ヲ所有シ松前其他地方ヘ物品ヲ積送ルモノ往々之レアリト雖モ過半ハ自カラ船ヲ所有セス得意先キノ船着港スルトキ其物品ノ売捌方ヲナシ又ハ積入荷物ノ買入等ヲ周旋スルヲ以テ業トナス、該港ヨリ輸出スル所ノ米ハ凡ソ年ニ二十余万石右ノ内凡ソ三分ノ二ハ下ノ関大坂辺ヘ向キ三分ノ一ハ松前地方ヘ趣クト云フ、下ノ関大坂辺ヘ向ケ米ヲ積入ル、船ハ大抵綿、塩、鉄、木綿ノ類ヲ当港ヘ積入レ其帰リニ米ヲ積ムナリト、又松前箱館地方ヘハ米、酒、味噌、畳建具、其他野菜ノ類ニ至ルマテ当港ヨリ輸送スルモノ多シ松前地方ヨリハ塩、魚、鱈、魚油ノ類ヲ積帰リ内地ノ需用ニ供シ若松、米沢、地方ニモ輸送スルト云フ、故ニ北海道ハ北越ト商業ノ関係頗ル大ナリ、然レトモ飛脚船並ニ西洋形帆船等ノ通航ナク且ツ為換荷為換等ノ便ナキヲ以テ其通商未タ盛昌ナラス頗ル緩慢ナルモノ、如シ、尤モ近々三菱会社ノ船月ニ一二度位箱館ヨリ当港ヘ廻ルコトニナルト云フ、当港ニハ五十石以上ノ商船百五十余艘五拾石未滿漁船川船等凡千五百余艘アリ

当港ハ貸庫頗ル多シ重ニ米穀ヲ預リ預リ券ヲ出シ之ヲ管守ス倉敷ハ一俵ニ付一ヶ月二厘五毛ヨリ三厘五毛位、就中鈴木長八ノ貸庫最モ多シ庫数凡ソ五十余戸アリト、又信濃川ヲ隔テタル対岸ニ沼垂町アリ全所ニ旧新発田藩ノ倉庫アリ、庫数総テ四十七因テ之ヲ新発田ノイロハ庫ト唱ヒシ由、維新ノ後全所ノ商人等之ヲ買受ケ貸庫トナシ預リ券ヲ出シ専ラ米穀ヲ預ルヲ以テ業トナス、第四銀行ニ於テ貸付金ノ抵当ニ取りタル米穀ハ大概鈴木長八ノ預リ券ト沼垂貸庫ノ預リ券ナリ

右ノ外猶追々貸庫ノ建築ヲ企ツルモノ多シト云、斯ク貸庫増加スル所以ハ、蓋シ銀行ト米商會所アルヲ以テ米穀ノ輻湊殊ニ多キニヨルナランカ、或ハ云現今ノ公園地内ニハ従来北越諸大名ノ倉庫多クアリシカ公園ヲ開クニ付之レヲ毀チタルヲ以テ港内ニ於テ倉庫ノ数大ニ減シタリト

当港ハ所謂皿港ニシテ湾ヲナサス、信濃川ノ河口ハ遠浅ニシテ大船ヲ泊スルニ便ナラス、日本形ノ船ト雖モ稍々大ナルモノハ往々其出入ニ苦シムヲ以テ、大船ハ海岸ヲ距ル殆ト二三里許ニ碇泊シ、烈風ヲ避クルニハ佐州夷港ヘ赴クト云、故ニ現今ノ有様ニテハ港ト云フニ足ラス

新潟管内ニハ会社甚タ少シ、五泉町ニ製糸会社アリ、

新発田ノ豪商白勢成熙等ノ開設ニ係レリ然レトモ格別盛ナラント云、又該港ニ全人ノ設ケタル蒸気機米搗所アリ、日々数拾石ノ米ヲ搗クト云、三条町ニ新月会社アリ其資本金式万五千円ト云、新潟ヨリ長岡迄往復ノ川蒸気船会社アリ、又長岡ニ女工場アリ紬海氣ノ類ヲ織出ス、但県庁ノ設立ニシテ人民共立ノ会社ニアラス、右ノ外貸付会社ノ類ヲアルヲ聞カス

越後ノ地タル沿海良港ナシト雖トモ、内地ハ信濃川阿賀川中ノ口川五十嵐川等大小二十余川アリ、皆舟楫ヲ通スヘシ故ニ運送極メテ便ナリ、道路ハ之ニ反シ往々險惡ニシテ平坦ノ地ト雖トモ車ノ通スル所甚少キハ遺憾ト云フヘシ、殊ニ東京往来三国通りノ如キハ北越ニ於テ最モ緊要ノ道路タリ、而シテ所々羊腸ノ險アリ運輸極メテ困難ナリト、三国通りノ内六日町駅ヨリ清水村ヲ経テ上州前橋へ出ル間道アリ清水越ト称ス、三国峠ニ比スレハ一二日程モ近く、且ツ直チニ利根川上流ニ出ツルヲ以テ通船ノ便アリ、然レトモ清水村ヨリ八九里ノ間人家ナキヲ以テ单身ノ行客ニアラサレハ通行セスト、若シ此ノ道ヲ開鑿シテ東京往来ノ本道トナサハ、北越ノ幸福實ニ洪大ナラン

東京ヨリ三国峠ヲ経テ越後へ入ル商品ノ多クハ唐糸金巾小間物類ニシテ凡ソ年壺万駄ノ多キニ至レリ、唐糸ハ大抵見附町商人ノ仕入ニ係ルト云、全所ハ戸数僅カニ千百余戸ノ市街ト雖トモ商業ニ勉励スルモノ多ク、桐油ヲ製シ木綿縞ヲ織リ諸方へ販売スルモノ少シトセス、唐糸ノ如キ其仕入高凡ソ年三千駄此代金三拾万円位ト云フ、而シテ右金額ハ越後ヨリ東京へ趣ク茶ノ代金桐下駄ノ代金縮布ノ代金会津御蔵入込ヨリ横浜へ出タス人參ノ代金等ヲ為替ニ取組ミ、正金ヲ持送ルコト甚タ少シト云フ、若シ斯ノ如キ地方ニ銀行アラシメハ為換ノ如キモ一層ノ便ヲ得、從テ其商業ノ進歩スルヤ疑ヲ容レサル所ナリ、又見附ノ木綿縞ハ頗ル手広ニシテ、若松米沢山形庄内秋田青森仙台地方並ニ北海道へ仕送り売捌クト云、現今見附商人ノ進退スル機數凡ソ三万挺ト云、然ルニ近来長岡、見附町ヲ距ル三里、ニ於テモ木綿縞ヲ織出シ夫カ為メ見附縞ノ声価ヲ落シタリト、何トナレハ見附縞ハ唐紅ヲ用ヒテ紺色ニ擬シ未タ洗ハサルニ其色変シ、長岡ニテハ染色品柄トモ吟味スルヲ以テ其価ハ見附縞ニ倍スレトモ、人々之ヲ好ミ見附縞ヲ嫌忌スルニ至レリ、現今長岡ニテハ機數僅カ千挺位ナレト雖モ追々増加ノ勢ヒアリト云

長岡ハ第六十九国立銀行創立ノ許可ヲ得タル地ニシテ、新潟ヲ距ル十六里殆ト越後ノ中央ニ位シ信濃川ノ上リニアリ戸數三千五百余戸、戊辰ノ際兵火ニ罹リ家

屋ノ建築等粗糙ナルヲ以テ市街ノ景況頗ル衰微シタルモノ、如ク見ユルト雖トモ、其商業ハ戊辰前ニ比スレハ進歩セリト、維新前ハ旧長岡藩アルヲ以テ座カラ商業ヲ営ムモノ多ク、所謂旦那様商人ノ風アリシカ、戊辰後大ニ憤發シ、東京ヨリ金巾類其他ノ諸品物ノ仕入僅カノ口錢ヲ以テ之ヲ転売シ、随テ買ヒ随テ転売シ専ラ資本金ノ速ニ運転スルヲ務ムル等其商業殆ント新潟県第一等ニ近シト、故ニ金巾類其他舶來品ノ如キハ北越中諸方ノ商人等東京へ出スシテ往々長岡ヨリ仕入ヲナスモノ多シト云、此上右創立許可ノ銀行開業スルニ於テハ、必ラス商業ノ進歩ヲ助ケ数年ヲ出テスシテ其地ノ景況大ニ觀ヲ改ルモノアルヘキヲ信スルナリ

新潟第四国立銀行 明治七年三月一日開業

(中略)

一 該店ノ營業ハ人民ノ貸付ト県庁ノ為替ヲ勤ムルヲ以テ專ラトナス、故ニ為替ノ金額ハ官ニ属スルモノ多クシテ人民ニ属スルモノ少シ、而シテ其口數ハ之ニ反ス今其人民ニ属スル東京為替ノ金額ヲ平均スルニ一〇百六円余ニ過キス、蓋シ新聞社へ送り金ノ類多クシテ、該地商人等ノ仕入金ニ係ルモノ少ナキカ故ナルヘシ

(中略)

一 貸付金ハ通計百十四口其金高貳拾五万四千四百余円ナリ、平均一口ニ付凡ソ貳千二百拾円ニ当ル、抵当ハ米穀地所家屋最モ多シ公債証書株券等之ニ次ク信用貸ハ六口ニシテ其金高壹万六千六百余円ナリ、又米穀ハ大概沼垂貸庫及鈴木長八貸庫ノ預券ナリ、其他米売預証書或ハ借用人自身ノ米預証書ヲ抵当トセンモノアリ、地所家屋ノ抵当ハ大抵旧貸付ニシテ、近頃ハ斯ノ如キ抵当ヲ以テ貸付ヲナススト云

(中略)

一 定期預金ハ通計二十四口其金高九万四千六百余円ナリ、内県庁並ニ管内計算掛病院ノ分八万貳千貳百余円、米商會所ノ分壹万余円、残り貳千四百余円ハ官員二口士族一口僧侶二口農商四口外国人一口都合十口ナリ

一 当座預金ハ官ノ分ヲ除キ通計十口其金高貳万七千三百余円ナリ、内管内計算掛町會所ノ分壹万八千余円、米商會所ノ分八千九百円、残り四百余円ハ士族一口官員二口ノ分ナリ

一 当座預金貸越シハナシ、又貸越シノ約ヲ結ヒタルモノナシ

- 一 振出シ手形ハ官ノ分ヲ除キ過半米商会所ト該地商人鈴木長八ノ分ナリ

(中略)

- 一 該店ノ諸帳簿ハ能ク整頓セリ
- 一 該店ハ旧町会所ニシテ其建築ハ通常商家ノ如クナラス稍官庁ノ体裁ニ近シ、又目今石門鉄柵ノ建築ヲ企テ専ラ築造中ナリ、金庫ハ頗ル堅固ニシテ一兩年前ノ建築ニ係ル、其外抵当物ヲ入レ置ク土蔵一棟アリ
- 一 該店所有ノ公債証書ハ新債拾六万八千九百貳拾五円此買入代金九万五千九百九拾九圓九拾五錢三厘、証書面百円ニ付五拾六圓三拾五錢余ニ当ル、秩禄拾六万七千五百七拾五円此買入代金拾四万七千三百四拾貳円二拾七錢二厘、証書面百円ニ付八拾五圓三拾四錢余ニ当ル、ナリ今之ヲ目今ノ相場ニ比スルトキハ凡ソ三万五千元計リノ利益ニ当ル
- 一 金銀ノ有高ハ貳拾貳万五千八百七拾貳円參拾壹錢五厘ナリ、内流通紙幣ノ準備及ヒ諸預金ノ準備ヲ差引キ残金即チ全ク使用シ得ヘキ金額ハ八万九千五百四拾壹円五拾四錢九厘ナリ

(後略)

資料Ⅱ 渋沢栄一による追想

<解説>

本資料は、『軽雲外山翁伝』の202-214頁に掲載されている追想談である。

よく知られているように、渋沢栄一は1869（明治2）年から73年の大蔵省の在職中に、国立銀行条例の立案をはじめ銀行制度の導入・確立に尽力した。

前述のとおり、外山は1873年に大蔵省に出仕したが、その時点では両者の直接的な接点は見出し得ない。渋沢が第一国立銀行の総監役（後に頭取）となって以降、銀行の検査業務を担当した外山と関わりをもった。第一国立銀行サイドは、外山の実直かつ妥協を許さない仕事振りを煙たがったものの、渋沢は外山の実務能力および堅実な姿勢に一目置くようになった。

渋沢は外山に対して、五代友厚からの要請による大阪の第三十二国立銀行（後に浪速銀行）の経営再建を推進すべく、総監役への就任を強く勧めた。外山は、これを受けて1879（明治12）年に着任し、金融界ないし実業界へのデビューを果たしたのである。

渋沢が外山の業績ないし功績のなかで最大に評価しているのは、興信所の設立である。渋沢は、近代的なビジネスの普及および拡大のために、企業間の信用の確立をたいへん重視した。そして、各企業の信用のレベルを客観的に測定かつ明示する機関としての興信所の立ち上げが不可欠とした。外山も渋沢と同様の認識をもち、銀行と企業間の信用取引および手形決済の増大を目指して、早くから興信所の設置を構想していた。渋沢、外山ともに周囲からは強硬に反対されたものの、外山はその意志を貫き、1892（明治25）年に商業興信所の設立をなし遂げた。これを受けて、渋沢がリーダーとなった東京興信所や帝国興信所、人事興信所などが次々と立ち上げられてその体制が確立・強化され、信用調査の重要性が広く定着するところとなった。渋沢が指摘するまでもなく、日本における近代的ビジネスの確立・拡充において一大画期となったのはまさに特筆すべきであろう。

渋沢は、外山が自身のスタンスをよく理解して大阪でそれを実践している点を高く評価する一方で、外山も渋沢のことを大いに尊敬し大阪での活動のベースとしていた。両者の関係は、前稿で取り上げた渋沢と岸宇吉との関係とはほぼ同様であったといえる（詳しくは、拙稿「岸宇吉と松方正義・渋沢栄一に関する資料」長岡大学地域研究センター『地域研究』第9号、2009年11月を参照されたい）。

子爵渋沢栄一氏談

外山脩造君とは古い交りであるからして、其人と成りは詳に知つて居るやうに考へるが、始めて懇意になつた頃の記憶は大分薄らいで居り、殊に外山君が大阪に住はれてから縷々相見るの機会がありませぬ故、逸事と云ふやうなお話しをする事は出来ませぬ。

私が同君から最も深い御相談を受け又御世話をした時は同君が官を辞して浪速銀行、其時には三十二銀行と謂つた平瀬龜之輔氏の経営する大銀行に従事することになつた時でありました。

是れより先き同君は大蔵省紙幣寮に在つて、第一国立銀行にも度々検査の爲めに來られた。其時分は紙幣寮の銀行検査が余程厳密であつて營業の振合、貸付の取調べをするとか、預金の性格を吟味するとか、其預金も定期当座、小口当座と云ふ様に中々綿密に取調べた。其極銀行の將來の経営方針は如何にせられるか、此有様で満足するか等と質問された。當時は独り銀行

制度に限らず、各商店の営業振りでも、従前の如くに品物を店先に備へ付けずに、倉庫に置いて見本で売買すると云ふような方法でなければならぬ、又小売店の飾付けでも欧羅巴風、亜米利加風の新式でなければいかぬと云ふやうに、凡ての商売を欧米仕組に改善させやうと云ふことに就て共に力を画した時代であつて、外山君は未だ頭要の位地に居つた人ではなかつたけれども、さう云ふことには頗る緻密な考へを持ち至つて熱心であり、且つ自分で是ならと信ずる事は必ず断行すると云ふ性質の人であつた。当時私は先輩として同君から尊敬されたのであるけれども、第一国立銀行頭取としての遣方が不適當と思ふと、コンナ事をしてはいかぬと無遠慮に非難すると云ふ様な剛直の人でありました。検査に来られる毎に余に八ヶ間敷い事を言ふので、銀行の人は又外山君が来たといつて嫌ふ位であつた。私も議論ではなかつたけれども、総じて新しい事業を經營するに就ては一時に充分なる事は出来るものではないと云つて、多少同君に反対した事があつたやうに覚えて居ります。然し私は却て其八ヶ間敷く言はれるのを面白く感じて、斯う云ふ人は他日大いに發達するだらうと思つて、懇親にしました。

夫れが因縁となつて、私は同君を平瀬亀之輔氏の經營して居る銀行、即ち浪速銀行の前身たる三十二国立銀行にお世話する事になつたのであります。而して其平瀬氏の希望を私に伝へたのは多分五代友厚氏であつたと思ひます。序でながら五代氏の履歴をお話を致して置きたい。五代氏は薩摩の人で、頗る才子で且つ海外の事情も能く知つて居り、英語は完全に通じなかつたけれども極めて改進黨の進取主義で政治界にも関与して実業界に尽力した人であつた。殊に薩摩出身の関係からして大久保利通、大隈重信等の諸大家とも至つて懇親で、所謂元勳と云ふ人々とは常に接触して居つた。碁を打つとか、煎茶の師匠を連れて行つて座敷の飾付を世話するとか、親しく交際せられて居つた。併し自身は政治界に雄飛すると云ふよりは実業界に於て大富豪になることを企画せられたものと見えて、私が明治六年に官を辞して銀行者になつた頃、五代氏も大阪に於て役人上がりの商売人であつた、併し自分の本業を定めて毎朝出勤して夕方退出すると云ふ様にはせず所謂紳商或は政商として時機を見ることが中々機敏であつた。例へば支那と物議が起るとか、台湾に騒動があるとかいふて、弗相場が高くなるだらうと思ふと、思惑買ひをすると云ふ様なことには随分手が廻つた人であつた。之に反して私は投機事業は大嫌いでそれが良

い悪いと云ふ訳ではないが、其点に於ては私と全く主義を異にしたからその事に付ては少しも談し合はなかつた。けれども他の方面からは先づ懇意であつた。此五代氏が、大阪の銀行にも本筋に修行をした人を入れて遣らせたいと思ふが、誰か人がないかと云ふ相談で、私が外山氏を慫慂して、君一つ銀行業の實際に當つて遣つて見る気はないか、唯官吏として理論に傾き、人の仕事の指図許りでは実業は發達しない、君の如き学識がある人が實地に就て勉強すれば、銀行も段々發展して行くであらうから、官を辞して実務に就かれてはドウかと云つて切にお勧めした。これが外山君の紙幣寮を辞して銀行者となる端緒であつたらうと思ひます。

其頃相前後して紙幣寮から銀行業に移つたのが遠藤敬止氏である。外山君は越後の人、遠藤君は会津の人で、紙幣寮に於ての位地は同格であつたが、年齢は外山君の方が長じて居つたかと覚えて居ります。外山君は理論的に事物を緻密に考へて極く堅固に遣る性格なるに、反して遠藤氏は大風呂敷で、或点から言ふと手腕もあつたやうです。其頃宮城県は昨年死なれた松平正直氏が知事の時、仙台藩士中に有名なる増田繁幸と云ふ人が藩士に下付されたる金禄公債証書を基礎として一銀行を立てさせたいと頻に心配して、亘氏とか氏家氏とか仙台藩の名望ある人々が打寄つて相談をせられた。松平知事も大にこれを賛成して、頻に世話をし、私が国立銀行設立師範役と思はれて居つたから、是非世話をし呉れと居ふお頼みであつた。是に於ては私は遠藤敬止氏を仙台に、外山君は大阪にと相前後して紙幣寮の人材を実業に就けたと云ふ訳であつた。外山君は段々に其事務を進めて完全に事物を仕上げ、其終りを全ふせられたが、遠藤氏は之に反して末路は余り充分ではなかつた。

外山君が愈々意を決して官を辞して大阪に行かれてから随分困難されたやうであるが、大いに私の当時の勧誘に感じて居つたものと見えて、数年の後私の所へ来られて、「彼の時は実はドウなるかと思つたが、私も今日は大阪に於ける一銀行者となつた、此れは実に貴下のお陰であるから、報恩の記念だ」と云つて立派な書幅を贈与せられた。外山君が如何に其事に就て深く心に感じて居られたかは想像し得らるゝのであります。

外山君は浪速銀行の外に貯蓄銀行を造られて、其銀行を盛大なものに仕上げた。此貯蓄銀行のことに就ては私は相談に与つたのではない。只後で聞いたのであ

る。又三十二銀行時代其経営に就ても唯折に触れて相談を受けた位のものであつた。夫れとても何時ドウ云ふ相談を受けて如何なる回答をしたと云ふ記憶はありませぬ。只多くは意見を同じくしましたから互に話し合つて東京の扱ひ方なども参考に供し協力事に當つたに過ぎぬのであります。

夫れから外山君に対して私が大いに賞賛せねばならぬ事は信用調査即ち興信所の設立であります。東京には今日東京興信所と云ふものがあるが、元來銀行者として必要なるものは鄭寧なる方法に依つて得意先の信用を綿密に取調べて報告すると云ふ事である。得意先から言ふなら他人の身代を調べるのは不都合であると立腹するか知らぬが、併し公平の眼を以て能く調べて貰ふと云ふ事は得意先とても寧ろ宜いと思はねばならぬ。資産の堅固なる者が不堅固に報告されるれば信用を減ずる。又悪い者が善く報告されると当人の為に仕合せであるとも、世間を誤るの恐れがある。故に得意先の信用程度は成るべく明瞭に分かるのが、堅固の商人には寧ろ満足に思ふ筈である。所が当時の日本は、東京も大阪も中々左様なる有様でない。新式の銀行者と旧式の商売人とは殆ど水と油で、一瓶に入れても融和しないで兎角分離する状態に在つたのは誠に困つたものであつた。私は是非とも之を一致させなければならぬと思惟したが、左ればと云つて私が前掛姿になつて条理も規則もなく学理的に事を処すると云ふ仕組みでも破つて了ふと云ふことは、旧弊を改良する方法ではない。凡て事物を改善しやうと云ふには或点では旧來の仕方に善い事があるけれども、勉めて新式にして西洋の長所を取らせなければ我々の主旨が貫徹せぬのである。然るに従來の商人から見ると第一に我々が生意氣さうに危険さうに思はれる新式は余計な手数である。大変に入費が掛かる様に見える。木綿の着物を着、紺の前掛を締めて用が足るのに、羅紗の洋服を着し金時計を掲げて帽子を冠り靴を穿いて車を乗廻はす、あれでは費用が余計掛ると云ふて嫌ふのであつた。左様の風で凡ての方面に於て新しい事は移つて来ない。銀行の当座預金の取引杯も如何に勤めても応じない。預金を小切手で引出すと云ふことは、此れ程の不便ではないと云ふても、不便のやうに思つて同意する者がなかつた更に進んで手形取引を勧誘すると信用証文を公衆の前に出すやうな気がして、ソナ物は絶対出たかないと云ふて応じない。又公債証書を所持するといふことは安心が出来ぬと云つて誰も応じない。甚しきは明治十一年に大蔵省に於て起業公債を發行するに就

て、第一国立銀行と三井銀行とが其取扱方を命ぜられ、私はさう云ふ新式の事に智識があると云ふので、大阪を始めとし京都、名古屋、岐阜等の各地を巡回した。大阪では其時渡辺昇氏が知事であつて、私に本願寺に於て公債応募の演説をさせられた。さう云ふ塩梅に私は各地の巡回演説をしてヤツト政府の發行する起業公債一千万円の引受人を作つた。併し夫れも各地に国立銀行が設立されて居たのですから、新式の商人即ち国立銀行に抛りて其地方の有力な人を集めて種々公債の講義をして漸く応募が出来たと云ふ始末であつた。こんな風であるから当時の商売人の信用程度と云ふものは中々知ることが困難であつた、亜米利加ではブラッドストリート、倫敦でも信用調査所の完全な方法は立つて云る。日本でも此調査所を組立てたいと東京大阪の銀行者は頻に考へて云つたが、年月は儘に覚えませぬが、大阪の方が先鞭を着けたのである。是は外山君が其頃欧米を巡廻して其感を強めたものと見えて大阪の同業者と申合せ、恰も牧野と云ふ適任の人があつて興信所を大阪に作つた。其後私も是非東京で作らねばならぬと云つて同業者に勤めて段々其人を穿鑿して、終に森下岩楠君が其任務に當ることになつて、今の東京興信所が出来たのである。夫れから後に帝国興信所、人事興信所と、興信事業が追々に進んで、今日では或は供給が過ぎるかも知れない。興信所設立の事は全く外山君の功績として最も金融界に特筆大書すべき事と思ひます。

要するに外山君は極く親切な人で、又質実剛直の性格で、自己の是と信じ非と思ふた事は、仮令ひ貴頭であらうとも、又先輩であらうとも、遠慮なく其説を述べる。且つ事物を緻密に考へる人であつた。惜い哉晩年に健康を損じて、私が数年前大阪に行つた時杯には、杖に縋り人に手を引かれて大阪ホテルに来て呉れた。私が君は余程弱つたやうだが、ソナ事ではイカヌと励ますと、貴下の丈夫なのが羨ましいが、貴下は又丈夫過ぎると云つて談笑した事があつた。竟に其衰弱が進んで私より年は大分下と思ふが先きに逝かれたのは残念に思ふて居るのであります。

資料Ⅲ 今泉鐸次郎による追想<『北越新報』1916(大正5)年1月16日付)>

<解説>

今泉鐸次郎(号・木舌)は、新潟県立長岡中学校などで教鞭を執った後に言論界に転じ、東北日報や長岡日報(後に北越新報)の主筆として健筆を揮った。また、長岡市会議員や新潟県会議員、新潟県教育会副会長、長岡製氷専務取締役を歴任するなど、多方面にわたり活躍した。

今泉は、河井継之助の伝記を執筆するにあたり外山に取材をおこなった。外山も進んで応じ、その成果をもって、1910(明治43)年に博文館から『河井継之助伝』として刊行されるに至った。この間に、今泉と外山は昵懇の間柄となっていったのである。

今泉による追想のなかで最大のポイントは、新潟県内での石油事業をめぐる岸宇吉との関係についての記述である。外山の謹厳実直ないし生一本な性格が明確に出ているエピソードといえる。ただ、別な角度からみれば、外山はそのパーソナリティーゆえに大きなビジネスチャンスを逸したわけであり、企業家の業績ないし成果としてはマイナスの評価となり得よう。

他方、資料Ⅰでも指摘されているように、外山は東京との鉄道敷設にあたり、直江津や長野を迂回する北越鉄道ルートよりも上越ルートの必要性和これへの最大限のコミットを強調・表明している。新潟県内のインフラ網整備に対する外山の先見性は大いに評価できる。

なお、本資料は、『軽雲外山翁伝』の195-201頁にも掲載されている。

逝ける外山脩造翁

外山脩造翁の為人は、翁の創立し経営せる大阪貯蓄銀行が最も能く説明して居るといつてもよいであろう。大阪貯蓄銀行は拾万円の資本金で、貳百万円の積立金と約貳千万円の貯蓄預金とを有し殆んど全国に儔ひなき堅実の貯蓄銀行である。翁は老来大方の公職より関係事業を絶たれたが貯蓄銀行丈は其逝かるゝ今の今まで重大責任のある事業として其手を切られなかつた。翁は実に此の銀行の如くに堅実なる仁であつた。

翁は河井蒼龍窟(河井継之助:引用者)に愛された人で、又蒼龍窟の大崇拜家であつた。翁は戊辰当時寅

太といつて絶へず蒼龍窟に随従して居つたが、我輩の翁と相識るに至つたのも、河井伝の著作に従事してからのことで翁から蒼龍窟の行事を聞くべく翁の上京を機会に我輩も上京し、毎夕日本橋倶楽部で晚餐を一緒にしながら話を聞いたので、前後十一日間を費したのが其始めである。翁の蒼龍窟観は河井伝にも載せて置したが、(中略)翁は平生蒼龍窟に私淑して居られたが、其剛情なりしことの如き、天分とはいへ蒼龍窟の感化とも見られる点があつた。

翁は夙に石油事業の有利なるに着眼し、斯業を視察すべく海外に赴くに先だち態々帰国して入懇の岸宇吉氏に対し、越後の石油事業は頗る有望有利であると信ずるから、将来大規模に経営して見たいと思ふ。自分は一と先づ先進地を視察してくるゆえ、それ迄にどこかしことはいはずに越後全部の借区権を得て置いて貰ひたい。若し借区の金があるならば置いていかうかと相談された。岸氏も之に賛成し、然らばそのやうに取計つて置かう。金は自分で取換て置くからといふことであつた。

斯くて翁は安達仁蔵氏を顧問とし石油事業を視察する為米国に行つた。後で山口権三郎氏等の主唱で岸氏も賛成して日本石油会社が出来、岸氏は翁の分として百株か五十株かいくらかの株を取つて置た。其中に翁は大抱負を懐いて帰朝されたに、案に相違し岸氏は何等其約束を履行してないのみならず、日本石油会社が成立つたとて其株を持って貰ひたいと話されたので、翁は大に憤激し協力どころではない岸氏に対して其の不都合を詰つた。岸氏はさまざまに弁解し、三島(億二郎:引用者)、内藤(久寛:引用者)の諸氏も其間に立ちて斡旋されたが、翁は断乎として岸氏に対し私交は私交とし、今後とて渝らぬ御交際は自分に於ても望むが、将来事業上に就て御一緒にやるといふこと丈は確く御断りをするといつて岸氏との間公然事業上の提携を絶つこととなつた。

其後翁は瓦斯事業のことで来越されし際、石油事業に出資しては如何かとさまざま勧誘されても一切断はられたが、其折我輩に実は先年岸氏との間に斯る事ありし為め、あれ程に思ひ込むだ石油事業も其後一切断念した次第であると語られた。又北越鉄道の発企された際松方(正義:引用者)侯から翁に対して株式を持つて呉れまいかと切なる勧誘があつた。然るに翁は信州に地代を払ふやうな迂回の鉄道株は利益があつても持つことは出来ぬ、上越鉄道ならば縦し配当が寡なからうと自分の力で出来る丈け出資もしやう尽力もし

やう、自分の調査した所では将来三朱の配当を見ることが出来やうと思ふ、今のやうに鉄道事業に多額の配当を期待するは間違つて居るといつて、とうとう候の切なる勧告に応じなかつたそうだ。是等は翁の性格の一端を説明したものといつてよからう。

翁に商才ありしや否やは我輩にはよく解らぬが、士魂のあつたこと丈は明かで、其為人が堅実で如何にも義理固かつた。数年前不治の病に罹られてから一切の公職は勿論、幾多の関係事業と其手を断たれた際、我輩に大阪貯蓄銀行は自分の生命である、それに大阪舎密工業会社は創立以来まだ利益を見ることが出来ずに居る、それを自分の都合で身を引くといふのは社の責任者として又自分を信用して株を持つて呉れた人に対し如何にも済まぬ、それ故に是丈けは死ぬまで……相当の成績を挙ぐるまでは辞さぬ積りであると語られたが、凡ての言動がこんな風で翁の関西実業界に其重きを為したのも、畢竟此の堅実なる性格と仕事の遣口とが之をして然らしめたことと思ふ。我輩は悪いこととは知りながら少々なげやりな方であるが、私交上に於て翁の義理固き交際振りには幾多慚愧の念を禁じ得なかつたことがあつた。

翁は晩年書画を愛し随分逸品を所蔵されてをつたやうだ。(中略) 翁の最も珍愛されたのは良寛上人の書で、これも随分蒐められたやうに聞いて居る。翁が斯くの良寛上人の書を愛されたのもやはり蒼龍窟に対する崇敬心からで、蒼龍窟は平生越後人で豪いものは酒呑童子と上杉謙信と釈良寛とであるといつて居られたそうで、良寛を尊ぶのは河井さんを尊ぶのであるとは翁の我輩に談られた所である。(中略) 過ぎこし方を懐へば人事傷心の種ならぬはなし、瞑目想を遣れば何時も袴を着け端然として諄々語るゝ翁の風采が躍出する。翁は実に人格の人であつた。

(以下、次号)

【注】

各資料には、読み易さを考慮して、適宜句点または読点を付した。

【付記】

本稿は、「平成20年度長岡大学教員研究費B」による成果の一部である。